



# 金澤家屋プロジェクト

Kanazawa Modernism is Japanese Authentic

金澤家屋 審美会 株式会社 家元 ×タテマチ大学

この国の家の美学は金沢に宿る、と仮定する。

金沢に宿る美意識を、我々の家づくりに灯したいと考えました。日本家屋のあるべき姿は、この街の歴史を学び、文化を識り、生活様式を鑑みることで見えてくるのではないか、という仮説です。町家や武家屋敷を愛でる金澤をひも解く糸口として、まずは3名の識者の話に耳を傾けてみました。「日本家屋」ならぬ「金澤家屋」をつくるプロジェクトのスタートです。

金澤家屋プロジェクトは、NPOタテマチ大学との共同プロジェクトです。

[スペシャルインタビューを見る](#)

[イメージサンプル集を見る](#)

[トップページ](#) [経営理念](#) [ご挨拶](#) [社名とロゴ](#) [実績集](#) [会社概要](#) [採用情報](#) [お問い合わせ](#) [ブログ「家元の理」](#) [広告](#)

Copyright (C) 2012 IEMOTO All Rights Reserved.



I E M O T O



陶芸家・デザイナー

## 大樋 年雄

1958年、十代大樋長左衛門の長男として金沢に生誕。ポストン大学大学院修士課程取得の後、陶芸家・デザイナーとして活動し、数々の受賞歴・講演を誇る。金沢市橋場町の大樋美術館で数々の大樋焼作品を体験できる。

[スペシャルインタビューを見る](#)



茶道裏千家 今日庵業林部講師

## 奈良 宗久

1969年、十代大樋長左衛門の次男として金沢に生まれる。1995年に裏千家今日庵へ入庵。宗家直下の伝承者として認められ、業林部講師として茶道の指導に全国を飛び回る日々を送る。

[スペシャルインタビューを見る](#)



華道本能寺 若宗匠

## 中野 天心

1972年京都生まれ。日甫上人(1692年没)を流祖とする華道本能寺の若宗匠。国内外のセレモニー・店舗プロデュースなどで多彩に活躍。京都市中京区堺町通で生花店BAIANを経営。

[スペシャルインタビューを見る](#)



金沢21世紀美術館 館長

## 秋元 雄史

1955年東京都生まれ。1991年から2004年までベネッセアートサイト直島の運営責任者。屋外型美術展「直島スタンダード」や「家プロジェクト」を担当。地中美術館館長を経て2007年から現職。

[スペシャルインタビューを見る](#)





## 中野 天心

1972年京都生まれ。日甞上人(1692年没)を流祖とする華道本能寺の若宗匠。国内外のセレモニー・店舗プロデュースなどで多彩に活躍。京都市中京区堺町通で生花店BAIANを経営。

[スペシャルインタビューを見る](#)



## 秋元 雄史

1955年東京都生まれ。1991年から2004年までベネッセアートサイト直島の運営責任者。屋外型美術展「直島スタンダード」や「家プロジェクト」を担当。地中美術館館長を経て2007年から現職。

[スペシャルインタビューを見る](#)



金沢工業大学教授 環境建築学部長

## 水野 一郎

1941年東京都生まれ。東京大学工学部建築学科卒。大谷研究室を経て1979年から現職。代表作品は「金沢市民芸術村」「手作り木工館『もく遊りん』」など。1997年にグッドデザイン大賞受賞。

[スペシャルインタビューを見る](#)



株式会社アクティー 代表取締役社長

## 喜多 甚一

1966年七塚町生まれ。20歳で起業。現在(株)アクティーを母体とした10社を越える総合物流輸送企業グループBeingGroupのCEOとして約800人を率いる。近年はタクシー・バス事業にも進出。

[スペシャルインタビューを見る](#)



300年使った茶碗は300歳になる。  
住まい手の心があれば家もいい年齢を重ねていく。

陶芸家・デザイナー 大樋 年雄

Q. 米国で暮らしていたことがあるそうですね。

「ボストンです。金沢よりも暑くて寒い街です。多くの人がアパートメント・マンションに暮らしているのですが、冬はTシャツ1枚でいいほど暖房がきいている。夏はエアコンで寒いくらいですね。いわば家に四季がない。金沢の家には季節がある。暦もあります。だから冬の寒いときは家族がなんとなく一か所に集まったり、親が温かい料理を作ってくれたりしますよね。お正月やお盆には親族が集い語らう。手を合わせたり、尊敬の念を抱いたり、正しい言葉を遣ってみたりもね。家が現代的になりすぎると、そういうものが失われるんです。家の進化といいますが、人間を退化させているものを果たして進化と呼んでいいのか。最近のモダンとされる家は神棚や仏壇を置く床の間もありません。その床の間を上から足で踏み歩くような二階をつくっている。間取りがどうこうという話の以前に、人間の発想としてまちがっていますよね。先祖に感謝していないような人たちがそこに住んで、子どもが生まれて、いい子どもに育つわけがないと思います。正座をすることの意味、先祖を奉ることの大切さ、親を敬愛することの尊さ。家が家らしくあることで人間性が育まれる。とりわけ日本の家はそうだった。今後もそうであってほしいですね。」



300年使った茶碗は300歳になる。  
住まい手の心があれば家もいい年齢を重ねていく。

陶芸家・デザイナー 大樋 年雄

Q. 陶芸と家づくり。共通するものはありますか？

「わたしの陶芸は、三歩進んで一歩下がる。ゆっくりとした速度で物事を考えていきます。大工さんの仕事もそうですが、後戻りできるんですよ。やってみて、見つめ返して、やり直してみる。それが手仕事ですね。わたしはなるべく道具を使わない。ほとんどすべてを自分の手で作って行って、道具の必要性を感じたら自分で道具をつくってそれを使う。家も、陶芸も、道具に合わせてつくるものではないですね。こういうかたちにしたい、というイメージありき。作り手と使い手の両方の想いですね。ちなみに茶碗というのは、お茶を飲んでいると褪せて色が変わります。つねに新品でありつづけることはない。300年経った茶碗は300歳になります。大切に使われつづけた茶碗はいい風化をする。いい年齢のとりかたをするんです。家もそうでしょ。住まう人がどう使うか。作り手が魂をこめてつくっても、使い手と心がつながっていなかったら狂った方向に行く。逆に作り手と使い手の想いや願いがひとつになって、住まう人がていねいに生活をすれば、どんどんいい家になっていく。金沢には古くなくても素敵で味のある家があるでしょ。あれはまさに作り手と使い手の心がつながって成立したものです。いい年齢を重ねた家ですね。」





300年使った茶碗は300歳になる。  
住まい手の心があれば家もいい年齢を重ねていく。

陶芸家・デザイナー 大樋 年雄

Q. 同じ作り手として家をつくる職人をどう見えていますか？

「徒弟制度の鑑ですよね。わたしの家は職人さんに建ててもらいました。コンセプトは“すべて手づくり”です。設計はほとんど自分でやりましたから、オーケストラの指揮者のような立場で大工さんとともに作品をつくりました。大工仕事の工程が大好きなんです。昨今の2×4などは工場生産ですね。それを現場でつないでハイできましたという。大工さんは柱のすべてに番号をふって、自らの手で切って、削って、叩いて、現場に仲間を呼んで自分たちの手で要領よく仕上げる。で、完成したらお酒を飲む。ある種の儀式ですよね。ああいうのを見るとすごく勉強になります。伝統芸能の域にある職人仕事には信念や理念を感じます。わたしはよく温故知新じゃなくて“温新知古”とお話します。古きをたずねて新しきを知るのではなく、新しいものを探求していくと結果的に古いものを知るんです。知れば分かります。昔の人が信念をもってつくったものは尊敬に値しますよ。新しいこと、すなわちオリジナルを追求する過程で伝統の何が大切かをもういちど考えながら進んでいく。家づくりにも共通することだと思います。金沢にはいい職人さんがいるのですから、施主になる方はその伝統芸を知り、それを活かす指揮者になればいい。」



◀ インタビュートップ





千利休は『和敬清寂』と言った。  
現代の家は、その“清”が希薄になっている。

茶道裏千家 今日庵業縁部講師 奈良 宗久

Q. 茶室といえば狭くて小さい空間を連想します。

「それは小間(こま)ですね。千利休が2畳ほどの空間を茶室にした。それ以前は6畳または4畳半が主流でした。さらに前の室町時代までは広い板の間を茶室にしていました。広い空間に置き畳を敷いて、屏風で囲んだりしてお茶を嗜んだ。みなさんのイメージする茶室空間が生まれたのは、その後の桃山時代からですね。日本人の精神性が大きく変わった時代に、千利休が茶室や道具をどんどん変えていきました。楽茶碗や竹の茶杓を置いてみたり、手桶を水指しにしたり、魚籠を花入れに見立てるなどして、茶の湯という非日常の世界に日常のものを採り入れていったわけです。こうして信長や秀吉や千利休の時代を経て、茶の湯は江戸時代になって庶民に広く普及していきます。とりわけ金沢の浸透度はすごかった。武士や商人や一般の人までお茶を愉しみ、お稽古までする。一般的にお茶の盛んな土地では、やはりお殿様をはじめとした上層の人に限るんです。金沢の町家には江戸時代から近代にかけてつくられた茶室が200以上残っています。全国を見わたしてもこんな街は他にありません。客人が来てお茶を出すときも、他の土地では煎茶ですが、金沢ではお抹茶が出てくるでしょ。独特だと思います。さすがは百万石の国なんですね。その影響力や浸透度は他を圧倒しています。」



千利休は『和敬清寂』と言った。  
現代の家は、その“清”が希薄になっている。

茶道裏千家 今日庵業塾部講師 奈良 宗久

Q. 金沢にはおもてなしの文化があると思います。

「その象徴がお茶の文化ですね。亭主は来客に備えて何日も前からしつらえをはじめます。露地のところからすべて掃きそろえ、庭もきちんと剪定(せんてい)する。昔の人は、それこそ庭の葉の1枚1枚を拭くくらいやった。一事が万事ですね。季節によっては畳を張り替えたり、樋や垣根を新鮮な青竹にしたりもしました。茶の世界では“清浄”ということがやかましく言われます。客人のもてなしも、粗を排除する…すなわち清浄するという考え方なんです。千利休は『和敬清寂』(わけいせいじゃく)という言葉を残しています。現代の家にはその“清”が希薄です。365日の便利だけを追求した生活空間になっています。たとえば五節句といわれる節目の行事が一般家庭から消えている。それを行う場が家の中がない。本来は節目の儀式によって身を正し、日々の汚れを払い、清浄して次へ向かうわけです。ですから節句の折には床の間に床飾りをしたいのですが、床の間自体が現代の家にはない。今回のテーマの金澤家屋には、床の間のある和室はあってほしいですね。単に応接間があるだけでなく、客人にお抹茶を出して、和菓子を美味しくいただいて、床飾りを崇めるという。便利な日常のための空間だけでなく、ちょっとした非日常を愉しむ場所がある。それが金沢らしい家かもしれませんね。」







千利休は『和敬清寂』と言った。  
現代の家は、その“清”が希薄になっている。

茶道裏千家 今日庵業幹部講師 奈良 宗久

Q. 昨年ご自宅を新築された。設計のコンセプトは？

「この自宅の場所は金沢の美観地区なんです。景観に反目したりロケーションを損なう家は建てたくなかった。街に融けこむ外観はもちろんですが、たとえばこのリビングの壁を見て下さい。本物の石垣をそのまま壁の一部に使っています。300年以上前の延宝年間の地図を見ると、この場所には川が流れていました。金沢城の惣構堀です。その石垣を埋めるのではなく、そのまま残したわけです。金沢の景観や歴史を壊すのではなく、家に活かしていこうというのがコンセプトのひとつですね。おかげで構想から3年もかかりましたよ(笑)。家全体の佇まいも金沢らしい情趣を大事にしたいと思いました。金沢の家は、比較するなら京都の家よりしっとりとした風情があります。祇園などの古い街並みは美しいのですが、あちらは日本を代表する観光都市ゆえに、どこか力が加わっている。造られて残されている感じがするんですね。対して、金沢は外部の影響を受けていない。無理のない日常のなかで育まれたものがある。人工的なものではなく、雪や川といった自然とあいまって落ち着いた時間がただよっていますね。イメージとしては、雪の舞う東山や主計町のしっとりとした街並み。ですから雪とどう付き合うかを考えて建てた家もまた、金沢らしくていいなと思うんです。」



◀ インタビュートップ





日本家屋だから畳を使う？ 縁側をつくる？  
そんな退屈な家は見たくないですね。

華道本能寺 若宗匠 中野 天心

Q. 金沢は小京都という。京都に住む中野先生から見た金沢の印象は？

とてもストイックな美意識を感じますね。東茶屋街っていうんですか。カッコいいですよね。京都の祇園も同じように古い町家を残す町ですが、祇園以上にストイックな印象を受けました。いちばん新鮮だったのが、路地で夜空を見上げたときの景色の潔さです。屋根が低くつくられているから、余計な灯がなく澄んだ世界が広がっている。おそらく歴史的には京都の町の模倣からはじめたのですが、金沢の町には研鑽やオリジナリティがある。クラシカルな建築とモダンが共存していますよね。京都ではこうはいきません。歴史的建造物を保存するばかりです。古来の建築をそのまま大事に残そうとしている。どちらが優れているということはありませんが、保存するだけではマーケットが広がらないんですよ。華道も同じです。伝統的な方法論では衰退の一途をたどるでしょう。いまのライフスタイルや哲学にあわせてどうやって生け花のよさを伝えるかを考えなければいけない。たとえば同じツバキを生けるにしても、わたしの場合は床の間に葉を100枚くらい敷きつめる。そこに1輪の花を据える。美の本質を見ざるを得ない状況をつくるんですね。そういう創意工夫が金沢の町にはある。保存する美学ではなく、進化発展させていく美学。次世代に受け継ぐべき日本家屋の在り方というのは、まさに金沢の町から生まれるかもしれませんね。



日本家屋だから畳を使う？ 縁側をつくる？  
そんな退屈な家は見たくないですね。

華道本能寺 若宗匠 中野 天心

Q. 伝統的な日本家屋のよさってなんでしょう？

こんな話があります。京都に町家をリノベーションして東京や海外のお客さまに譲る古い不動産会社があります。先日その会社に頼まれて庭を手がけた町家があるんですがね。とにかく不便な場所にあるんですよ。幅2mくらいのウナギの寝床のような小路をずっと歩いて行ってやっと家が見えてくる。家の前に車もタクシーも乗り付けられません。そんな辺鄙な立地なのに売りだしたら即売ですよ。売却後も20組ぐらいの見学者が押し寄せました。彼らが求めているのは便利さじゃないんですね。その場所でしか味わえない景色とか匂いとか情緒を求めている。町家や日本家屋の価値って、そこだと思うんですよ。茶室の造りもそうでしょう。「にじって入る」と言われるように、わざわざ入口を小さく設けてある。履物も脱がなければいけない。すごく面倒ですが、そうすることで醸しだされる味わいや価値があるんですね。華道のもてなしも同じです。たとえば夏なら主人は客人に「夕方の5時に来てください」と言う。なぜならその時間に夕顔が咲くからです。ぜんぶ咲き切ったあとでは価値がない。もちろんつぼみでもいいけど、咲き始めて花が開くその瞬間をお客さまに見せる。これ以上ない最高のもてなしですよ。その土地でしか採れない木材を使って、その土地独自に受け継がれた技をもった職人が、その土地でしか味わえない空間や情緒をつくる。それが日本家屋の真髄でしょう。





日本家屋だから畳を使う？ 縁側をつくる？  
そんな退屈な家は見たくないですね。

華道本能寺 若宗匠 中野 天心

Q. いまの家づくりを見て思うことは？

もっと“らしい家”をつくりましょよと言いたいです。家はファッションです。たとえば今日のコーディネートメインが黒のレザージャケットだとしますよね。それに赤いインナーを合わせますか？紫のコーデュロイのパンツを選びますか？それじゃ黒のレザーの質感が活かないかもしれない。そんなちぐはぐなコーディネートがいまの家には多く見受けられる。洋間が並ぶなかに取ってつけたように床の間があったり、あるいはどの家もぜんぶ同じ間取りだったり。生け花には陰陽思想という哲学があります。ずっと伸びた細い線。これを活かすために、その対極にある大きな面やゴツゴツした立体をコーディネートするんですね。陰と陽。コントラストの演出です。そうやって1つのテーマのもとにすべてが一体となって役割を果たす。家づくりも、そうじゃないと、自分の好きなものや自分らしさを家全体で表現する。庭の竹が好きなら、それを毎朝眺められるベッドルームをつくれればいい。あるいは花を生ける床の間からはじまる家づくりがあってもいい。点からできる空間なんて素敵じゃないですか。100人の家主がいれば100通りの家ができる。「金澤家屋」もそんな家であってほしいですね。日本家屋だからといって安易に畳を使ったり縁側をつくる退屈な家は見たくない。ぞっとするような日本家屋を見たい。京都にはない美学をもつ市民や職人がいるこの町ならきっとできるはずです。」



◀ インタビュートップ





金沢の家には言語化できない情趣がある。  
それを醸し出せる職人がいるんですね。

金沢21世紀美術館 館長 秋元 雄史

Q.日本の家の魅力はなんだと思いますか？

「そうだなあ。まず伝統的な木造建築というのは独特の建て方をしますよね。西洋の家づくりでは図面がすべてです。設計図をつくったら、あとは材料をはめていだけ。だからどんなデザインにも対応できるようなコンクリートや鉄といった汎用的な建材が好まれるんです。やっぱり日本は木でしょう。木は生き物です。どの場合でも応用できるパーツとは違うんですよ。木はその土地の気候風土に適応して生きてきたので、その土地で使うのが一番いいんです。しかも山で北向きに生えていた木は北向きの柱に、南向きの木は南向きの柱に、というふうに自然に近い状態で建てるほうが強くなります。材料ありきの家づくりなんですね。日本の大工は木材の1本1本の性格を推し量って家を建てます。そういう職人の知恵や腕による部分は設計図に前もって書くことができないんですよ。効率的なやり方とはいえませんが、でも実際に建った家は、やはりすばらしい。たとえばコンクリート建築の耐久年数は一般的に30年くらいだと思います。金沢の町家は150年以上もっていますよね。なにより町家には言語化できない趣や情緒があるでしょう。歳月を経た木の表情。色あせた畳の味わい。こういう身体的に感じる機能って、効率性を重んじる図面本位の家づくりでは出せないんじゃないかな。」



金沢の家には言語化できない情趣がある。  
それを醸し出せる職人がいるんですね。

金沢21世紀美術館 館長 秋元 雄史

Q. 金沢の町の個性をどうとらえていますか？

「いいまちですよ。この町のよさって『金沢らしさ』がはっきり見えるところだと思います。太平洋側の都市に行ってみてください。極端な言い方ですが、みんな町のつくりが東京に似ているんですね。『東京のミニチュア化』している。日本は良くも悪くも東京を中心に国家がつくられていますよね。たとえば道路網や路線網は東京から地方へ伸びています。そんな中で金沢は東京に従属することなく、独立した都市たらんとしている。たとえるならヨーロッパの都市国家のような、金沢中心のまちづくりをしようとする意志が見えるんですよ。ではその『金沢らしさ』とは何かといえば、大きな特徴は加賀百万石の時代から受け継ぐ手工業の存在ですね。かつて江戸の幕藩体制の頃は、どの都市にも個性的な産業がありました。漆や陶器や焼き物のような。しかし近代化の中でほとんどの産業が衰退したり、変質したり、あるいは分業化して生産地を海外へ移してしまった。金沢のように町全体を代表するようなものとして伝統産業が残っていることは貴重なんですね。生産性という点では遅れているかもしれませんが、いまは大量生産時代が終わって人びとが新しい生き方を模索している時代です。こういうローカリズムや職人の手仕事もつ可能性って大きいと思うんですよ。」





金沢の家には言語化できない情趣がある。  
それを醸し出せる職人がいるんですね。

金沢21世紀美術館 館長 秋元 雄史

Q.金沢は“使う美”を宿す町と仮定していますが、いかがですか？

「金沢の特徴というより、そもそも日本伝統の美がそうなのでしょうね。日本人にはある日常的な営みをひとつ取り出して、それをベースに哲学や芸術を築くという側面があるんですね。わたしは最近プライベートで茶道をはじめたのですが、これなんかは好例でしょう。もともとはお茶を点てて飲むという日常茶飯事から、わびさびの世界観や陶芸や茶室建築などの芸術が生まれたんですから。こういう感覚は西洋人には理解できないんですよ。「ハイアート」と「ローカルチャー」という言葉がありますよね。彼らは絵画や彫刻といった純粋美術を、庶民的な生活文化と切り離して高次元のものとして考えている。つまり、用途のないものほど評価が高い。ダ・ヴィンチのモナリザはなんの道具にも使えませんよね(笑)。ひるがえって日本では、お茶を飲む道具の茶碗がわびさびの美や抽象的な世界観をあわせもっている。まさに“使う美学”ですよ。先にも触れましたが金沢の町には九谷焼や茶室建築といった伝統工芸が色濃く残っています。その技を受け継ぐ職人がいて、それを愛する町の人がいる。日本の美意識を継承する町、と呼んでもいいんじゃないでしょうか。『金澤家屋プロジェクト』でしたよね？この町の職人なら生活機能と美を両立させた家づくりもできるかもしれませんね。」



◀ インタビュートップ





## 町家を越える都心居住システムは 建築史上いまだに現れていないんですよ。

金沢工業大学教授・環境建築学部長 水野 一郎

Q.金沢の伝統的な家の特長はどんなところですか？

「まず雪国で暮らす知恵が詰まっていますよね。わかりやすいのが屋根の形です。茶屋街の町家を思い出してください。屋根が玄関のある表通りに向かって下りてきています。こういう建築様式を「平入り」と呼びます。本来なら「切妻」という屋根の山型の部分が正面に見えたほうが格好はいいんですよ。でもそうすると屋根の斜面が横に下りて、冬の屋根雪はみんな隣の家に落ちてしまいます。「平入り」は雪国で隣近所に迷惑をかけないためのルールなんです。最近の住宅メーカーはこの常識を知らないで呆れてしまいます。もうひとつ特徴的なのは、農家を中心とした郊外の家屋の広さです。石川県の1戸あたりの住宅面積は全国でトップクラスです。これは雪が積もると庭や縁先などの屋外空間が使えなくなるので、代替機能を家の中に確保したからです。広い土間や縁側や雪囲いがそれです。これらの空間は冬の農作業場になったり、炭や薪や食糧の備蓄所になったり、防災避難地になります。土間を採り入れた住宅を設計したことがあります。接客スペースとしても活躍しますよ。みなさんが家に客を呼ぶのが億劫なのは、玄関の上にあげるのが嫌だからですよ。でも土間までなら気軽に招き入れられる。現代の人はこういう知恵をもっと先人から学ぶべきでしょう。」





## 町家を越える都心居住システムは 建築史上いまだに現れていないんですよ。

金沢工業大学教授・環境建築学部長 水野 一郎

Q. 雪の対策以外にどんな美点がありますか？

「そうですね。わたしは町家を越える都心居住システムはいまだに現れていないと思ってるんですよ。最新鋭のマンション？到底かないませんよ。ひがし茶屋街の地図を見てください。猫の額のような土地に何十軒という家が密集しています。なのに生活環境はいたって快適です。家々の間に中庭が点在しているでしょう。これが周りの家の通風や採光の役割を果たしているんですね。集団で生活する工夫があります。都会のマンションでは隣の住人の顔も知らないという始末でしょう。町家は住民同士が助け合うことを前提に設計がされているんですよ。金沢の町家を見ると、つくづく職人の技に脱帽させられます。表の壁に「木虫籠」と呼ばれる紅殻格子がありますよね。これは外から家の中は見えないけれど、中から外は見えるという巧妙な造りになっています。風も通せば、光も通す。西洋建築でいうと「壁」と「天窗」の両方の機能を1つのフォルムで成立させています。見事ですよ。金沢の格子はとくにプロポーションがすばらしい。奈良や高山へ行くと、もっと格子が太いんですよ。金沢の格子は繊細で、最小限の鉄しか使っていない。いい木材といい職人がそろわないとできない仕事です。それだけ家に投資する旦那衆がこの町には多かったんですね。さすが加賀百万石の城下町です。」





## 町家を越える都心居住システムは 建築史上いまだに現れていないんですよ。

金沢工業大学教授・環境建築学部長 水野 一郎

Q.これから家をつくる人にアドバイスはありますか？

「もっと遊びましょよ、と言いたいですね。昔の金沢の家には遊び心がありました。家に上がると一般家庭なのに茶室がある。床の間には花鳥風月の軸が掛けられ、季節の花が活けられている。晩餐の食器は九谷焼。食事中には加賀友禅を着たお嬢さんが琴を披露してくれる。絢爛豪華な世界が広がっていました。金沢の町には家というステージだけではなく、掛け軸や九谷焼などの道具があり、茶の湯やお琴といった文化的な営みもあった。この3つがそろって町はめずらしいです。いまの金沢の人はそういう市民性を家づくりにも活かさないともったいないですよ。もうひとつ、わたしはこれからの家のキーワードは「家族回帰」だと考えています。いま多くの父親が子どもをコントロールできないでいます。母親は友だちと遊ぶのに夢中になっています。でも数年後にはバラバラになった親子がもう1度家族を大事にする時代が必ずやってくるでしょう。そうなったときにどんな家が理想的か？わたしは食卓中心の家だと思います。食卓は強制しなくても家族が自然に集まれる場所です。ダイニングをリビングとくっつけて家の中で一番広く、一番景色のいい部屋に設計する。大きなテーブルで家族全員が団樂のときを過ごす。じつはこれは昔の茶の間の発想ですよ。やはり先人の知恵は偉大、ですね。」



◀ インタビュートップ





最近の家は、予算をかたちになっている。  
しあわせをかたちにしていないんですね。

株式会社アクティイ 代表取締役社長 喜多 甚一

Q. 経営者にとって家とは何ですか？

「家は経営者にとって城です。会社も城ですが、家はその本丸ですね。わたしの場合は社長室より家にいるときのほうが仕事に集中できます。ビジネスを発想したり、学習したり、経営戦略の中心を担う場所です。いっぽう城には休息地という側面もありますね。家の設計には頓着ないほうですが、風呂とベッドだけはとりわけこだわっています。風呂は1日の疲れを癒やす場所です。多い日は3度入っています（笑）。家は大事ですよ。わたしは日ごろ社員に「家族をもて、家をもて、夢をもて」と話しています。家族は人生の共感者です。人生には悲しいことや苦しいことがいろいろあります。わたしも紆余曲折ありましたが、それに共感してくれる家族がそばにいたから奮起できた。強がらず、おびえず、毎日堂々と生きられるのは家族のおかげです。「夢をもて」とは、夫婦で共通の目標をもて、という意味です。いつか家を建てる。老後は海外で暮らす。そういう具体的な目標を共有しているかぎり夫婦は壊れません。最後に「家をもて」。家計の中で1番高い経費は住宅費です。もし自分が死んでも、家さえ残してあげられたら家族は生計を立てていける。住むところさえあれば何とかなる。未来永劫たいせつな家族を守るためにも家というアイテムは重要だと思います。」



最近の家は、予算をかたちにしている。  
しあわせをかたちにしていないんですね。

株式会社アクティイ 代表取締役社長 喜多 甚一

Q. 家づくりで1番大事なポイントは？

「目的を見失わないことです。家づくりの目的は家族がいっしょに住むことではありません。家族がいっしょにしあわせになることです。最近の家づくりを見ると、多くの人が家族のしあわせをかたちにしていない。予算をかたちにしています。つまり、しあわせをつくるという目的に向かっていない。自転車にたとえましょう。自転車にはレースで走るための競技用自転車がある。かたや買い物などに使う俗称ママチャリもある。同じ自転車でも両者の構造は全然違う。タイヤ1つ比べても、競技用自転車はママチャリの車輪幅の半分以下でしょう。ペダルもチェーンもすべて速く走るという目的のために構成された要素です。家も同じです。家族がしあわせになるための家だったら、玄関も居間も水回りもぜんぶしあわせになるという目的に向かって設計されなければなりません。ちなみにわたしはこれまで4軒の家に住みました。3軒目から目的を考えた。前の家は会社のすぐそばに建てました。社員と会議を開けるように大広間をつくりました。会社を守るための家だったんですね。いまの家は家族を守るための家です。子どもの通学の便とプライバシーの確保を第一に考えて、会社からわざと離れた町を選んだんです。家の設備もそうですね。女房と子どもに決めさせて、わたしは何も口出ししませんでした。」





最近の家は、予算をかたちになっている。  
しあわせをかたちにしていないんですね。

株式会社アクティイ 代表取締役社長 喜多 甚一

Q.「金澤家屋」とはどんな家だと思いますか？

「そうですね。まず、わたしは家族をしあわせにするには社会を豊かにしなければいけないと考えているんです。極端な話かもしれませんが、いくら財産を蓄えても、スラム街のような町では家族をしあわせにできないでしょう。そういう意味で金沢にはみんなで町をよくしようという文化がありますね。たとえばひがし茶屋街を考えてみてください。あそこに暮らす人は生活も商いもともにしながら、みんなで町をブランド化しようとしています。隣近所、町全体が助けあって生きているでしょう。東京では考えられませんよ。同じように家が密集している住宅地でも隣人の顔すら知らない。近所で火事があっても知らんぷりということが多いと思います。ひょっとしたら家づくりの違いにも由来しているのかもしれませんが、この町の人には地域社会との共存もうまいですが、自然との共生も得意です。ご存じのように金沢市には2008年から国連大学の高等研究所が設置されています。これは石川県の里山と里海の暮らしが、人と自然が永続的に共生するモデル地区に選ばれたからです。研究所長のあん・まくどなるど氏は「日本全国広しといえども、これだけ環境がととのっている場所はない」と語ってました。こういう共生文化を活かした家こそが、金沢らしい家。「金澤家屋」と言えるんじゃないでしょうか。」



◀ インタビュートップ





### 茶道を嗜む家

金沢の職人芸を披露するのにふさわしいのは、“茶室ありきの家”では？

[間取り・パースを見る](#)



### 紅殻格子の門

門を抜きにして日本の家は語れない、金沢らしい門の在り方を考えました。

[間取り・パースを見る](#)

COMING SOON

金澤家屋「茶道を嗜む家」

◀ イメージサンプル集トップ

## 侘びてこそ

ここは、もてなしの国、であらう。

日本にのこすべき金澤らしい家を考えるとき、ならば茶室ありきの家が現代にあってもよからうと。物質的な豊かさを追わず、精神の豊かさのみを求めてみる。質素にして素朴。清澄にして閑寂。侘びた茶の世界ゆえに、ありあわせの材料に見せつつ、じつは最上のそれを選びすぎる。材料やデザインは表装を避け、むしろ陰へと仕舞いこんで、粗末に見せながらも目を凝らすとよくできているという。

もてなしの心は、あくまでも何気ない所作にこめて表現する。

夏は暖簾をかけ、風薫る季節の花を飾り、客人が訪れる時間を見はからって露地に冷たい水を打つ。

冬は寄りつきに火鉢を置き、部屋をあたためてお迎えする。借景は云うにおよばず。

自然との接点をどうとらえるか。窓や開口部からのぞく光の道筋さえも計算づくで、

屋根や軒によって象られる陰影もまた、風情のひとつかと。



腰掛待合の土間から玄関を抜けて、初めに現れる間が侘びた茶室。考えぬかれた天井高や建具の内寸法によって、心静かな時間がそこに流れる。居住空間は広間の先へ、そっと、奥ゆかしく。



金澤家屋「紅殻格子の門」

◀ イメージサンプル集トップ

## 家の外に内

門、とはいかにも日本人らしい発想ではなからうか。

主人のもてなしの心が家の外までゆき届く仕掛けになっている。その発想の妙なるは、いちど門のない家を考えれば思い当たる。客人は玄関を訪れてはじめて主人のもてなしに出逢う。

そこでは前庭の花も、苔の風情も、表通りからつづく外の風景でしかなからう。

門のある家では、事が一変する。客人は門の内に足を踏み入れたとたん、

主人の心づくしがはじまっていることに気づかされる。花や苔は一期一会のもてなしに代わり、飛び石は客人のエスコートを務める。門は玄関の外の世界に、内の世界をつくりだす。

ならば金澤家屋にふさわしい門とはいかに、町家文化を残す町である。

町と共存するのがうまい市民である。外をゆく人にも内の風情をおすそわけする、紅殻格子の門。

内と外を分けるが、分け過ぎない。繊細でしなやかな感性を日本の将来へと受け継ぎたい。



門をくぐると、庭を散歩するように飛び石がめぐらしてある。客人をもてなしと同時に、玄関までに心の準備をするようを与える。いきなり家屋の正面を見せないのもさりげない気配り。

